

雪国の植物 ユキツバキ23

主に新聞に掲載のユキツバキの記事を拾う

石 沢 進

新聞や雑誌に掲載される植物の記事は、季節の訪れを知らせる内容が多いように思われる。春に咲く桜や水芭蕉などほとんど毎年のように報道されている。また、ある植物の咲く時期にカットや小コラムで掲載されることもある。しかし、中には季節に係わりがない記事もある。最近、植物に関する掲載記事を集め、その取り上げる内容や傾向などに関心を持っている。今回はユキツバキとその他の椿に関する記事を拾いあげてみた。すべての新聞や雑誌に目と通して集めたわけではなし、また、主として近年掲載の記事だけなので、不備の点が多いと思う。もし関心があり、以下の記事の外に情報を持っている方がおられたら提供をお願いしたい。

新聞に掲載された多くの内容をみるに、ツバキの場合は、開花の時期が11月から4月と長期にわたることもあり、掲載がある時期に特定しないようである。ツバキは日本人にとってかなり印象の強い植物であり、様々な観点から、年間を通じて話題になることを伺わせる。ユキツバキの記事は、北陸だけに分布することもあり、また、新潟県の県木であることから地元の新聞「新潟日報」によく掲載されている。

絵画や版画などの美術作品はツバキの花の時期にこだわることもなく、年間を通じて紹介されているようである。そしてその他の植物よりも年間を通じて親しみがもたれているように思われる。

殺伐とした多くの事件を報じるのも新聞の役割かもしれないが、身のまわりにみられる心和むような植物や自然に関する話題を多く取り上げてほしいと願っている。特に、環境問題、食料問題は植物との関係が極めて深く、地球上の植物の存続がない限り、人々の生活が脅かされることを知り、考える役割を新聞や雑誌に期待したい。現在の豊かな生活がそれほど長く保障されていないことを痛感し、豊かな生活を少しでも長く保つための知恵、豊かな心のゆとりを持ちたい。

ユキツバキに関する掲載記事など

広く一般（自生地、生態、まつり、観賞、保護など広範な内容で紹介）

●ユキツバキ（ツバキ科）

県の木シリーズ どうらん やさしい植物の知識

林業技術 1968年 315:5 倉田 悟

ユキツバキの形態、生態、分布について300字ほど

で簡単に紹介している。

絵：雪の下から立ち上がった樹と花（中野真人）

●野生を守るということ

山野草観賞は足運べ [ネイチャー in 新潟 < 37 >]

新潟日報 1999年（平成11年）1月26日 五十嵐 実
日本の椿は多くの園芸品種の原種になっていることや、ユキツバキの環境への適応の一端を紹介している。

写真：新津丘陵のユキツバキ

●春を待つユキツバキ

里山に咲くかれんな魅力 [森林からのメッセージ < 26 >]

新潟日報 2000年（平成12年）3月6日 長谷川昭一
ユキツバキの生態や分布を記述し、加茂の雪椿まつりや加茂公園の園芸品種の植栽について紹介している。

写真：雪をかぶったユキツバキ。雪の下でツボミがふくらんでいる

●ユキツバキ 雪味方に分布地拡大

にいがた里山ふれあい樹木図鑑 50

新潟日報 2001年（平成13年）3月27日 小林正吾
ユキツバキの分布や生態について解説している。

写真：雪の里山で膨らむユキツバキの蕾

民 俗

●奥三面 伝統的なクマオソ復元 朝日村教委 遺跡調査室で保存へ

新潟日報 1996年（平成8年）12月27日

熊を生け捕るワナにツバキの枝葉を使う実演し、それを遺跡調査室に保存していることを報じている（クマオソは、自然の木と、石を使って作る。仕掛けの上に石を並べ、周りをツバキの枝で覆って完成する）。

写真：旧奥三面集落出身者の前で、クマオソの仕上げをする小池さん

編者注：ツバキは付近に自生するユキツバキを使ったと推定。

●白い墓彩る可憐な花 彼岸入りにつくった記憶

雪墓と雪椿 [続 土とふるさと文化漂流 < 21 >]

新潟日報 1999年（平成11年）3月13日 南雲道雄

春の彼岸のころ、まだ残雪が多くて墓は雪の下に埋もれているので、雪上に雪墓を作り、ユキツバキの

枝葉を墓前に供えたとする。

写真：かれんな花を咲かせる雪椿

編者註：雪深い中魚沼郡中里村でのならわし。

庭園・公園

●県北の風景絵はがきに「北越後紀行」発売

新潟日報 1999年(平成11年)7月13日

写真：5枚1組の絵入り官製はがき「北越後紀行」と表の料額印面「越佐の花」

写真掲載の「越佐の花」に日本画家浦上義昭氏が県花チューリップと県木ユキツバキをデザインしている。

●酒博士が愛した花”雪椿染め”で来館者グッズ

頸城 坂口記念館が発売へ

新潟日報 2001年(平成13年)2月14日(夕刊)

写真：坂口記念館の来館者用グッズとして頸城村が作った「雪椿染め」や行灯

●酒博士めめた雪椿鮮やか 庭園の100種観賞客次々

頸城の記念館

新潟日報 2001年(平成13年)4月17日(夕刊)

写真：100種類もの雪椿が来訪者の心を和ませている坂口記念館の庭園

●日報抄(高田公園のツバキ)

新潟日報 1998年(平成10年)4月12日

編者註：故坂口謹一郎博士の「楽縫庵」から移植。

●雪椿(加茂市) 表情多様な5万本

お姫様思わず透き通る美[おもしろ旅くらべ]

新潟日報 2001年(平成13年)4月21日

写真：花の色、形を見ながら散策すると、種類の多さに気づかされる—加茂市・加茂山公園

美術

●椿花(加茂市) 写生帳の思い出(48)

涌井欽也(日本美術院院友) 悠 YOU 遊

新潟日報 1996年(平成8年)12月6日

え：やぶ椿の一種岩根絞りの絵画

加茂山公園は杉の木と雪椿の公園として紹介。

●雪椿 大矢紀 ふるさとの詩・季・彩

新潟日報 2000年(平成12年)3月3日

え：雪椿を花瓶に生けた絵画

加茂山公園の雪椿を紹介。

●え「三越美術特選展」から大矢紀「雪椿」

朝日新聞 2002(平成14年)2月1日 絵の写真掲載

食品・香料・その他

●枝ぶり見事 お菓子の”雪椿” ショット'98

新潟日報 1998年(平成10年)4月20日

写真：新潟市姥ヶ山二の和菓子店経営、榎本秀雄さん(55)が半年がかりで”育てた”労作だ

●雪椿

新潟日報 2001年(平成13年)9月29日(夕刊)

「ミス」が事故ナシPR 加茂

写真：ナシを配るミス雪椿の金井さん=28日、加茂市下条

抽出成分 お香に 新潟の専門店

写真：県木である雪椿のお香。着火すると豊かな香りが広がる

香立ては雪椿をイメージしており、赤い花卉と緑の葉を模した作りとなっている。

観光

●護徳寺観音堂(東蒲鹿瀬町日出谷)

戦国時代の落書きも 越佐の文化財⑧神社・仏閣編

新潟日報 1999年(平成11年)4月23日(夕刊)

写真：観音堂のそばを歩くとふっわとジンチョウゲの甘い香りが漂う。どこまでも続く静けさのなか、赤や桃色のツバキが境内に彩りを添えていた

編者註 樹形からユキツバキ由来のものとみられる。

ユキツバキ以外のツバキに関する掲載記事など

分布・生態

●ヤブツバキ 花みつ吸えば甘さ懐かしく

新潮風に揺れて…海浜の野草たち<4>

新潟日報 1999年(平成11年)10月7日(夕刊)

写真：ヤブツバキの花

新潟県内の分布や生育地を紹介している。

生け花

●椿・西東 女性たちに愛され 南沢道子

フラワーデザイナー花水光風 2

新潟日報 1997年(平成9年)4月18日

写真：グレー土焼き締め掛け花入れ。名残の薔(やぶ)椿の一枝に桜を添えて

「竹の花入れに五分咲きの白玉椿が一輪ひっそり入っているイメージに比べ、西の椿はひどく生々しく人間くさい。」と綴っている。

気象(予想)

●春告げる梅・ツバキ記録的早さで開花

気温約6度休眠を破る温度接する

朝日新聞 1998年(平成10)1月21日

春の訪れを告げる梅やツバキが各地で記録的な早さで咲き始めた、ことを報ずる。

- ツバキのお告げは 暖冬、少雪 妙高高原の和田さん
つぼみで予想
新潟日報 2001年(平成13年)12月7日
写真:玄関わきのツバキの木を見ながら予想する和田泰年さん
「つぼみが葉の下に多いと大雪、上だと少雪」とのこと。

観 光

- 東京都大島町 ツバキと切っても切れぬ仲
朝日新聞 1999年(平成11)2月7日
文と写真 松原照子
写真:島を一周する道路から、南端にある波浮の港を見下ろす。青い空と海に、ツバキの赤い花が映える

美 術

- 老いながら椿となって踊りけり 友禅 俳美術館
山崎 巖
新潟日報 1997年(平成9年)3月11日(夕刊)
写真:友禅の絵は、去る1月12日に放送されたNHKスペシャル「ミヤコ蝶々 76歳の勝負」から、頭を丸めた蝶々さんの舞台姿を描き、椿を散らしてみたもの
- ペアのアオサギ撮った村尾さんの作品が金賞
春告げる「野鳥写真展」県愛鳥センター
新潟日報 1997年(平成9年)4月4日
写真:「アオサギ」、「ヒヨドリ飛来」(ツバキ)、「オジロビタキ」(桜の枝)
ヒヨドリの飛来とツバキの花が一枚に撮影されている。
- 小倉遊亀さん天井画を奉納 東京・増上寺
新潟日報 1998年(平成10年)7月8日
写真:奉納する天井画を増上寺の藤堂恭俊法王に手渡す日本画家の小倉遊亀さん7日午後、神奈川県鎌倉市山ノ内
金地にツバキを描いた70cm角の天井画
- 雪の二王子(椿が前面に)竹武クニ(新発田市)
'97 にいたが美術作家 色紙展作品
新潟日報 1997年(平成9年)12月5日
- 椿 住吉 重雄(長岡市)
'98 にいたが美術作家 色紙展作品
新潟日報 1998年(平成10年)3月22日
- 椿 松川 フミ(新潟市)
'99 にいたが美術作家 色紙展作品
新潟日報 1999年(平成11年)4月27日
- 椿 中野 雅友(新潟市)
'99 にいたが美術作家 色紙展作品

新潟日報 1999年(平成11年)6月8日

- カット(椿)
日本経済新聞 1998年(平成10年)8月26日
- 版画(椿) 渡部清勝(佐渡版画村会員)
朝日新聞 1998年(平成10年)9月25日
- 版画(椿) 伊藤秀昭(佐渡版画村会員)
朝日新聞 1998年(平成10年)10月30日
- 版画(椿) 土田サナエ(佐渡版画村会員)
朝日新聞 2001年(平成13年)3月29日
- え(岩根絞) 稗田一穂[私の好きな句 のカット]
朝日新聞 1996年(平成8年)4月14日
- え(椿花) 伊藤木杉[北極のいのち、六十六の暦のカット]
朝日新聞 1997年(平成9年)2月12日
- え(斎藤三郎「色絵金彩椿文花瓶」) 諏訪志保
アートの回廊(86) 器に深み素朴な描写
新潟日報 2000年(平成12年)7月15日
写真:斎藤 三郎「色絵金彩椿文花瓶」(栃尾市美術館蔵)
40cmの八角形の大花瓶に椿の花が色鮮やかに生き生きと描かれている作品
- え(中川一政「静物」) 岩田多佳子 アートの回廊(95)
「生きた線」を大切に
新潟日報 2000年(平成12年)9月12日
写真:中川一政「静物」(中野邸美術館蔵)
つぼに生けられた椿と転げそうな柿、リンゴ、ミカンを描えた作品

園 芸

- 香りもう春 新津で椿とミニ水仙展
新潟日報 2001年(平成13年)2月6日
写真:訪れた人は丹精込めて育てられた椿に見とれていた=3日、新津フラワーランド
 - 漁火 いじゃいび(転機十) 高橋 治著
朝日新聞 2000年(平成12年)7月2日
ツバキが「日本からヨーロッパに渡り、その後南半球で日本と大体同緯度のところに広まった植物」として紹介している。
え(挿絵):ツバキ(風間 完画)
 - 一足お先に春膨らむ 椿銘木展がスタート 新津
新潟日報 2002年(平成14年)1月27日
写真:丹精込めて育てられた椿が集められた椿銘木展25日、新津市川根「花夢里について」
- ## 菓子・食品
- しんこもち<佐渡全域> 桃の節句彩る団子
ふるさと季節の味 28 小林瑠美子
新潟日報 1999年(平成11年)3月1日
写真:(椿の花に似せた模様をつけ、団子を椿の葉の

上に乗せる。)

●やせごま<佐渡> 輪切りにした団子

ふるさと季節の味 69 小林瑠美子
新潟日報 2000年(平成12年)3月6日

写真:(輪切りの団子につばき、あやめ、あさがおなどの模様をつける。)

●つばき餅(岩船荒川町) 懐かしい夏祭りの味

ふるさと一押し 94
新潟日報 2001年(平成13年)7月6日

写真:蒸しあがったつばき餅を切り分ける佐藤堅一さん。松月堂のつばき餅の形は三角だ=荒川町金屋(名前の由来は「昔餅を切るとき、包丁にくっつかないようにつばき油を塗ったから」という説があるが、定かでない、という。)

●椿油 東京都大島町 御神火の力をいただく

遠藤ケイの隠し味探訪
朝日新聞 2001年(平成13年)12月21日
伊豆大島の椿油をイラストを添えて紹介。

バッジ

●カメラアバッジ シンボルは手作り品

内田洵子候補 陣営一押し 4 ショット参院選
新潟日報 2001年(平成13年)7月23日(夕刊)
写真:ツバキをかたどったフェルト地の赤いバッジが人目をひく=新潟市役所前

その他のツバキの仲間

●金花茶 長年の夢の椿 種間交配進む 花と緑

清水秀男

朝日新聞 1997年(平成9年)2月11日
写真:椿のイメージを変えた金花茶

●ベトナムの黄色い椿 鑑賞価値高い質感ある八重花と緑 清水秀男

朝日新聞 1999年(平成11年)3月30日
写真:ポリウムあるベトナムの黄色い椿

●山茶花 大矢紀 ふるさとの詩・季・彩 久保田万太郎

新潟日報 1999年(平成11年)11月5日
え:(花瓶に活けたササンカ)

●庭園にサザンカ色添える 新発田

朝日新聞 2001年(平成13年)12月6日
写真:(咲き誇るサザンカの株 編者註 花の形からカンツバキと思われる)

●冬の色いろ 大矢紀 ふるさとの詩・季・彩

新潟日報 2000年(平成12年)12月8日
え:サザンカを花瓶に生け、カブヤトウガラシを描いた絵画

●暑さを忘れる清らかな大輪 ナツツバキ 花と緑

下園文雄

朝日新聞 1999年(平成11年)6月8日
写真:梅雨どきに咲くナツツバキ

●ナツツバキの木肌 幻想的なまだら模様 にいがた里山ふれあい樹木図鑑 18

新潟日報 2000年(平成12年)8月1日 小林正吾
分水町国上山のナツツバキに取り上げている。
写真:多色のまだら模様の衣装をまとして立つナツツバキ

●冬耐えて守り抜く「志」新潟の世紀 伝統 北限に香る茶

新潟日報 2001年(平成13年)9月29日
写真:昭和初期、ほおかぶりをした茶摘みをする地元の女性たち(常盤園提供)
70年代の製茶風景(九重園提供)

新 潟 日 報

2002年(平成14年)2月10日(日曜日)

飛び線虫を運ぶ▼「県内

ミキリで、松から松へと移動できないが、運び屋がいる。マツノマダラカ

力だ。独力では別の木に移動できないが、運び屋が、マツノマダラカ

虫が、松を急激に枯らし

てしまう。恐ろしい破壊

配である▼松枯れを起す

犯人の正体は、体長一

センチメートル。小さな線

虫が、松を急激に枯らし

日報抄

尾崎紅葉が明治の新潟の町並みについて「堀が巡り、柳が植えられている。ただ樹木は乏しく」と書いたように、新潟市はその昔から緑の潤いと縁が薄かったようだ▼その間にあって、貴重な緑の空間が海岸の松林である。市中心部に近い西海岸公園は樹齢五十一百五十年の黒松がそびえている。幹の直径が五十センチを超える松も多く風格が漂う。歴史的遺産のこの松が、松くい虫の被害に遭いかねないという。幸い今は青々としているが、新潟市では南浜や青山地区で被害が見られ、飛び火が心配である▼松枯れを起す犯人の正体は、体長一センチにも満たないマツノザイセンチュウ。小さな線虫が、松を急激に枯らし

の被害は一九八八年がピークで約四万立方メートル死した。本年度でも四十九市町村で発生している」と県農林水産部はいう。赤茶けた姿をさらす松は痛々しい。防除の決め手はないというからやっかいだ。西海岸公園の松がここまで育つには、先人たちの苦難の歴史があった▼新潟市史によると、飛砂被害で田畑が埋まり家屋移転も度々あった。植林は二百五十年ほど前、江戸時代にさかのぼる。一八四四年には、初代新潟奉行川村修就の尽力で植林地は広がった。管理が行き届かず枯れるなどし、明治後半には児童が植栽を続けた。荒廃と市民による植林・保護の闘いがあった▼営々と築いてきたものでも、失うときは一瞬である。貴重な遺産を次世代に残すために何ができるか、皆で考えたい。